

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために」
(平成 27 年度第 1 回研究会)

日時：2015 年 6 月 20 日（土）14:00-18:00

場所：AA 研マルチメディアセミナー室（306）

- ・プロジェクト趣旨説明（全員）
- ・中村隆之（AA 研共同研究員，大東文化大学）

「詩の国民性（民族性）とは何か？ 脱植民地化期のフランス語圏カリブ・アフリカ知識人における文学の問いをめぐって」

- ・コメンテーター：砂野幸稔（AA 研共同研究員，熊本県立大学）
- ・打ち合わせ（全員）

概要

第 1 回研究会を上記の日時に開催した。以下、概要を報告する（敬称略）。

まず AA 研所員である佐久間寛の司会のもと、メンバーがそれぞれ自己紹介をした後、代表者の中村隆之から本研究プロジェクトの趣旨説明がおこなわれた。

次いで同じく中村から上記表題の研究報告が、途中休憩を挟みながら、およそ 1 時間 30 分ほどなされた。その内容については報告者の要旨に代える。

1955 年、『プレザンス・アフリケーヌ』新シリーズの記念すべき最初の号に、エメ・セゼールの詩「ハイチの詩人ルネ・ドゥペストルの返事（詩法の諸要素）」が掲載された。ドゥペストルはこの年、アラゴンによる「国民詩（民族詩）」のキャンペーン（定型詩ソネに代表されるフランス詩の伝統への回帰の呼びかけ）を受け入れて、自らの「形式的個人主義の清算」を表明した。この表明に対する批判が前述のセゼールの詩であり、これを契機に、『プレザンス・アフリケーヌ』誌上で、アラゴンの主張とドゥペストルの態度表明をめぐって、カリブ・アフリカの知識人のあいだで論争が繰り広げられる。この論争は、セゼール研究においては「モーリス・トレーズへの手紙」（1956 年）に至る共産党離党への一連の流れのなかに位置づけられるが、この論争にかかわった作家のうちには、ほかにも、レオポール・サンゴール、ダヴィッド・ジョップ、アマドゥ・ムスタファ・ウッド、ジルベール・グラシアン、ジョルジュ・デポルト、ベルナル・ダディエ、エドゥアール・グリッサンなどがいた。本発表は、セゼールおよびこの論争に関する先行研究を押さえながら、できるかぎり包括的にこの論争を再構成することを試みたい。論争の背景をなす〈文学〉と〈イデオロギー〉の関係を念頭に置きながら、国民的（民族的）な詩をめぐって提

出されるさまざまな論点を明らかにすると共に、論争の場を提供した『プレゼンス・アフリケーヌ』の意図と立場についても見解を示したい。

上記の趣旨の報告を受けて、コメンテーターの砂野幸稔から、報告者が取りあげた『プレゼンス・アフリケーヌ』誌上の「民族詩」論争における「民族」と「言語」という主題を念頭に置いた、数々の重要な指摘がなされた。論争にかかわった詩人の世代による立場の違い、ドゥペストルの問題意識、シェク・アンタ・ジョップ『黒人諸民族と文化』（1954年）の重要性などである。

その後の全体の議論では、議論を補完する指摘、全体的なコメントおよび今後の共同研究の指針ともなる貴重な見解が寄せられた。

最後に第2回目の日時を決め、18時15分頃に研究会を終了した。

(文責：中村)